

学食の使用済み食用油で走るスクールバス誕生

バイオディーゼル燃料開発の国内最大手（株）レポインターナショナルと提携
学食の使用済み食用油を、環境にやさしいバイオディーゼル燃料にリサイクル

大谷大学(所在:京都市北区小山上総町/学長:木越康)は、バイオディーゼル燃料研究開発・製造・販売の国内最大手・株式会社レポインターナショナル(本社:京都市伏見区下鳥羽広長町173番地 /代表取締役 越川哲也)と提携し、学食の使用済み食用油をリサイクルした環境にやさしいバイオディーゼル燃料で、スクールバスの運行を 2018年6月21日(木)より開始します。

使用済み食用油は、リサイクルすると、バイオディーゼル燃料C-FUELに生まれ変わります。京都市では京都議定書が誕生した1997年から全国に先駆けて、家庭からの使用済み食用油から、バイオディーゼル燃料を製造し、現在、ごみ収集車や一部の市バスの燃料に年間約100万リットルを利用し、年間約2700トンの二酸化炭素削減を行っています。(2016年度実績)

本学のスクールバスは、火曜～日曜の週6回、スポーツクラブ活動やゼミ活動のため、烏丸北大路の本部キャンパスから湖西キャンパス(グラウンド)まで毎日2台・2便～4便が運行していますが、この度、学食の使用済み食用油をリサイクルしたバイオディーゼル燃料で走行することで、1,030.4kgの廃棄物排出量を削減し、年間約44トンの二酸化炭素が削減できると試算しています。

大谷大学では、2018年春、総合整備計画の一環で新教室棟を建築しましたが、ドライミストの設置や館内の重力換気構造だけでなく、太陽光で発電した電力でシーリングファン稼働や地熱利用も取り入れるなど、さまざまに自然エネルギーを利活用し、環境に配慮した設計を導入し、全学一体となって、省エネやCO2削減の推進に向けて取り組んでいます。(詳細別紙)



バイオディーゼル燃料で走るスクールバス

<本件に関する報道関係者の皆様からのお問合せ先>

大谷大学 企画課 安井・平岡 TEL: 075-411-8115 FAX: 075-411-8149

大谷大学広報デスク (プランニング・ポート内) 福嶋・橋本・古瀬 TEL: 06-4391-7156 FAX: 06-4393-8216

http://www.otani.ac.jp/kyo_kikan/museum/

大谷大学の省エネ・環境への取り組み

大谷大学では、2018年3月、総合整備計画の一環で新教室棟を建築しましたが、ドライミストの設置や館内の重力換気構造だけでなく、太陽光で発電した電力でシーリングファン稼働や地熱利用も取り入れるなど、さまざまに自然エネルギーを利活用し、環境には配慮した建築計画としました。

ドライミストや太陽光で発電した電力を利活用したシーリングファンは、身体が直接感じることによって体感温度への効果があります。

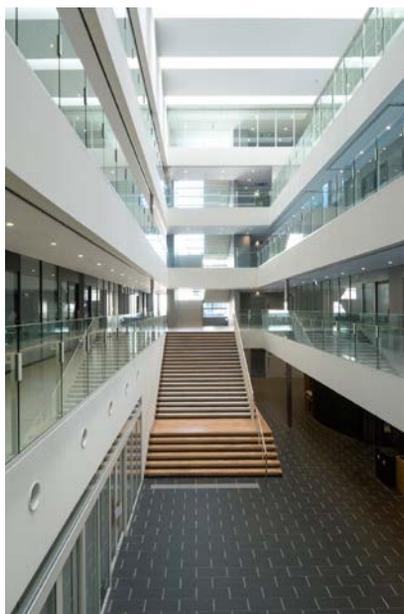
また、シーリングファンは冷房稼働時は設定温度を低く設定せず、暖房稼働時は暖かい空気をゆっくりと天井部分から床部分に抑える効果を念頭に、体感温度に効果を与えて省エネを実現するものです。

地熱利用は、外気を地熱を通すことによる、温める・冷やす効果を一部利用した後、館内に取り込むことによって、空調器の負荷を抑えて省エネを実現するものです。

重力換気は5層吹抜け空間による空気の重力効果と、最上部壁面ルーバー内に設置する換気扇がサーモセンサーによって作動し、建物上層部に滞留した温まった空気を館外へ放出させています。

これらの個々の工夫を行いながら館内全体の空気対流や循環へ向けた相乗効果として、省エネやCo2削減の推進に向けて取り組んでいます。

なお、総合整備計画の一環で学内食堂のリニューアルと委託業者も変更しましたが、本学でバイオ燃料利用の取り組みを行っている企業を調べたところ、地元である京都市では自治会が使用済の食用油の市民回収を長年にわたり取り組んでおられ、レポインターナショナル様がこの取り組み当初から使用済の食用油を独自の引取システムと燃料化事業に携わってこられた実績があることを知りましたので、学内外へ向けた啓発の一環として学内食堂内とバス本体に掲出して今回の取り組みを推進します。



スクールバスに掲出しているステッカー

環境に配慮して建築した新教室棟
「慶間館(きょうもんかん)」